



TITLE:

曹操論

AUTHOR(S):

井波, 律子

CITATION:

井波, 律子. 曹操論. 中國文學報 1972, 23: 1-27

ISSUE DATE:

1972-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/177290>

RIGHT:

曹操論

井波律子

京都大學

曹操、あざなは孟德、幼名阿瞞。

宦官の養い孫としての出生のハンディを負いつつ、後漢末の動亂期を並はずれた智謀と氣力によつて切り抜けて、權力の座につき、あるいは「亂世の姦雄」⁽¹⁾と評され、またあるいは「超世の傑」⁽²⁾と評されるこの人物は、同時に、李白によつて「蓬萊の文章 建安の骨」と氣骨をたたえられ、さらに「建安より來のかた綺麗にして珍とするに足らず」と追慕されたその建安文學の創始者であり、息子の曹丕・曹植、更には孔融・徐幹・應瑒・陳琳・劉楨・阮瑀・王粲らの「建安七子」⁽³⁾を擁する文學サロンの領袖でもあつた。この曹操の政治家・軍事家としての生涯、その生涯を貫く心的態度、さらにこれらと作品との相關關係をたどるのが、この稿の目的である。

曹操論（井波）

曹操の生涯とその思想のあり方を示す資料としてあげられるのは、陳壽の『三國志』と裴松之の注に引用されている諸書である。ちなみに陳壽は、魏の敵對國蜀の亡臣で、社稷に死すべき國君たる後主劉禪に、魏への屈辱的降伏をすすめたとして、後世惡評の高い譙周の弟子であり、後に晋の著作郎となつた人物。裴松之は劉宋の中書郎で、『後漢書』の范曄とほぼ同時代人である。かく晋の著作郎であつた陳壽の筆使いは慎重であり、あくまでも魏を正統として扱い、徐々にしかも確實にライバルを打ち倒して、實權を強化していく曹操の陽光を浴びた生の過程を、誹謗的言辭を注意深く避けて簡潔に記すのに比して、裴松之が引く諸書のうち『曹瞞傳』や孫盛の『雜記』など曹操に敵對感情をもつものは、小説的かつ暴露的であつて、「陰謀家・姦雄」曹操の暗黒面を描くのに急である。

だが、陳壽とて、曹操に對して、無批判であつたわけではない。例えば、建安十七年（二二）股肱の臣荀彧が死亡した時の記述には、陳壽の秘めたる非難がこめられている。事は『魏志』「荀彧傳」にみえる。この年、曹操が九錫を

たまり魏公とならんとするのに際して、荀彧は、「義兵を起したのは朝廷を正常な状態にもどし、國家を安定させるのが主意であつたはずゆゑ、いま人臣の位を極めるのはよろしくない」と反對した。これが曹操の怒りをかう結果になり、荀彧は憂悶のために薨じた、と記したあとで、陳壽は、傳を次のように結ぶ。

「……憂いを以て薨す。時に年五十。諡して敬侯と曰う。明年、太祖遂に魏公となる。」

書かずもがなのこの記述は、曹操の飽くことなき權力志向を、ひそかにしかし強烈に指彈している。『春秋公羊傳』ならば、「何を以て書せしや。譏るなり。何すれぞ譏るや。大惡を諱むなり。」とでも書くところであろう。

裴注に引く『魏氏春秋』では、もつとあからさまに、この時曹操が荀彧に空箱を贈り、それを受け取つた荀彧がその意のある所を悟つて、ついに毒藥をあおつて自殺した、と記している。自殺勸告として、君が臣下に劍を贈るのは古來常套であるが、空箱を贈るなどというのは前代未聞であり、曹操の冷酷非情を示してあまりあるエピソードでは

ある。

以下、時に、資料の取捨選擇、その配列、片言隻句によつて史官の寓意を秘める陳壽の『三國志』と裴注にそいつ、曹操の生涯にエボックを畫した事柄とその意味について、まず述べたいと思う。

一

曹操が、群雄雲の如くあらわれた後漢末において、他より一步拔きこんでた地位を獲得する契機となつたのは、やはり何といつても建安元年（一九〇）、獻帝を許に迎え、漢王朝の庇護者となつたことであつた。

それまでの曹操の軌跡を、ごく大まかにたどると次のようである。⁽⁴⁾

曹操が歴史の表舞臺に踊り出たのは、中平六年（一八九）のことであつた。この中平六年ほど、多事多難な年も稀だといえよう。まず靈帝が崩御し少帝が即位したあと、大將軍の何進と袁紹が共謀して宦官を誅殺せんとしたが、事前

洛陽に向かつていた并州の牧董卓が入洛、即位したての少帝を退位させ、獻帝を立てた。宦官の專横、黨錮の禁における言論弾壓による思想的頹廢、かてて加えて中平初年に勃發した黃巾の賊亂によつて、ほとんど機能マヒに陥つていた後漢王朝は、このクーデターによつて止めの一撃を加えられた形になり、ここにとどまることを知らない戰亂の世の幕が、切つて落とされることになつたのである。曹操は、この時點で、董卓の暴舉に反撥し、驍騎校尉に任じようとする卓の誘いの手を振り切つて、陳留に逃亡。家財を散じて義兵を糾合し、卓討伐の火の手をあげる。この時の戦力は五千。曹操は而立の年の三十歳。ちなみに文帝曹丕はこの二年前に誕生している。

翌初平元年（一九〇）には、袁紹を盟主とする董卓討伐連合軍に参加、曹操は短期決戦を主張したが、他將は動かず持久戦となり、彼のひきいる軍勢のみが董卓の大將の軍と會戦し、彼は流れ矢にあたつて負傷。（この初平元年の出來事を、曹操は「蒿里行」で歌っている。又、前年の中平六年のクーデターの前後については「薤露」で歌っている。後述。）

曹操論（井波）

初平三年（一九二）、青州の黃巾と戰つて殺害された劉岱にかわつて兗州の牧となり、黃巾を屈伏させ、その降卒三十餘萬を手中におさめ、曹操の勢力は一舉に増大する。このころより袁紹と袁術に間隙が生じ、曹操は後に最大のライバルとなる袁紹と結んで、術の派遣した公孫瓚・劉備・陶謙らを撃破する。この間に董卓は部下の將呂布によつて殺害されている。

初平四年（一九三）、當面の敵陶謙を攻撃⁽⁶⁾。翌興平元年（一九四）、再び陶謙の將と會戦、これを大破して、「過ぐる所多く殘戮さる」という大虐殺を行う。ところが、この出征中に、張邈⁽⁷⁾と陳宮が叛逆し、長安から敗走して來て諸將の間を轉々としていた呂布を迎え入れるという事件が勃發し、曹操は兗州に歸還する。かくて呂布を攻撃したところ、逆に撃破され、曹操は落馬、火傷をおう。まさに、曹操の生涯における最大の危機であつた。この間に、陶謙は死亡し、翌興平二年にかけて、曹操の全エネルギーは、當面の敵、呂布撃破に注がれることになる。

興平二年（一九五）夏、曹操は、奇襲戦法で呂布を大破し、

呂布は陶謙にかわつて徐州を領した劉備のもとに逃げ込み（ここでは劉備が呂布に襲撃されて曹操のもとへ逃げこんで来る）、やつと兗州を再び平定する。かくて曹操は、天子より正式に兗州の牧に任命され、ようやくここに根據地を確立したのである。

曹操が獻帝を迎えたのはこの翌年である。この時點では、袁紹・袁術・劉表・呂布など名うてのライバルたちが、虎視眈眈と中樞權力樹立を狙つており、曹操には、別に、彼らより優越する何ものがあつたわけでもない。むしろ出身・名聲・勢力ともに袁紹の方がはるかにまさつていたのである。

曹操は、シンボル効果というものを、熟知していた人間であつた。この時點で、「漢祚すでに盡く⁽⁸⁾」というのは、もはや共通の認識であつたが、ここであえて、何の實權もなく、わずかに名目上の任命權のみを有するに過ぎない皇帝を擁して立つたことには、二つの意味が認められる。

まず第一は、曹操の私的位相における意味である。このことにより、彼は、宦官の養ひ孫の成上がり者という出生

の汚點を、漢朝を支え、「賊亂」を平定する忠義の臣というシンボライズされた「高貴」のフィクシヨンである程度、隠蔽しうることになるのである。そして、このようにしてまあお、四代續いて三公の位にあり、「是に由りて勢天下を傾く⁽⁹⁾」名家の出である袁紹の書記だつた當時の陳琳から、「司空曹操の祖父中常侍騰、左悺・徐璜と並びに妖孽を作し、饕餮放橫、化を傷り民を虐す。父嵩乞匄攜養せられ、賊に因りて位を假り、金を與し璧を贗し、貨を權門に輸し、鼎司を竊盜し、重器を傾覆す。操は贅閹の遺醜にして、本より懿德無し⁽¹⁰⁾。」つまり祖父は惡德の權化の宦官、父親は乞食同然の貪官、と痛罵されざるを得なかつたこの出身のうさん臭さこそ、逆に彼に權力のメカニズムを透視させるパネになつたともいえよう。それにしても「贅閹の遺醜」とは痛烈である。これには後日談があつて、袁氏一族が敗北した後、歸順した陳琳に對して、曹操は、「お前は昔袁紹のために檄文を代作したが、『惡を惡むはその身に止まる⁽¹²⁾』というのに、何も父祖にまでさかのぼる必要はあるまい」といい、しかし、陳琳の文才を愛して咎めなかつたという

のであるが、確かにこの曹操のいい方にも、暗に陳琳の罵倒の根據となつた事實を全面的に肯定している響きがある。

第二は、公的位相における意味である。時は亂世、相拮抗する勢力が多々存在している中で、人心を自らの側に收斂し主導權を握るのには、シンボル化された道義的優越——大義名分が必要だつたのである。

この時、對立者袁紹は、決定的に後手にまわつてゐる。

曹操と袁紹は若い頃交友があり、いつも一語に無頼をはた⁽¹³⁾らいていたと『世說新語』假譎篇にあるが、袁紹には、かく彼を知る曹操に、「袁紹は大志を有すと雖も、事を見るに遅し」⁽¹⁴⁾と評されるような見通しの暗さ、決斷力の鈍さがあつたといえよう。陳壽は獻帝の許遷都前後の袁紹の姿を次のように記している。

「初め、天子の立つや紹の意に非ず（董卓が少帝を廢し獻帝を立てたことを指す）、（天子）河東に在るに及び、紹潁川の郭圖を遣りて焉^{こゝ}に使いせしむ。圖還りて紹に説き天子を迎えて鄴に都せんとす。紹従わず。會^{たま}たま太祖

天子を迎えて許に都し、河、南、の、地、を、收、め、關、中、皆、附、す。紹悔み、太祖をして天子を徙して鄴城に都せしめ以て自ら密近せんと欲せしも、太祖これを拒む。」（魏志「袁紹傳」）

この記述は、自立するには弱すぎる中間勢力・弱小勢力が、「天子を奉じてゐる」という大義名分を軸に、曹操の側に收斂されていく経緯、つまり、シンボルが具體的現實において果たした役割を如實に物語つてゐる。

このようにして獻帝を擁し、その庇護者の地位におさまつたために、曹操は飽くことなく篡奪の意志を持ちつづけた姦雄として、後世人々の非難を受けることになり、また事實これは曹操一世一代の大詐術であつたともいえるが、巨視的にみれば、曹操が「姦雄」にならなければ、他の誰かが「姦雄」になつたまでの話であらう。そして、そこには、曹操が建安十五年十二月己亥令（述志令）で、いつになくしみじみと來し方行く末をたどつて、「もしも國家に私という者がいなくなつたら、一體幾人が皇帝と稱し、王と稱したることか」と自負しているような、より荒廢した凄慘な

混亂狀況が繰り廣げられることになつたかも知れない。だから曹操は、人に疑惑を感じさせるその陰謀性のゆえに、逆に中原を平定しえたといえるのである。いわば、「權力への意志」と「濟世の志」が、曹操の中で不可分な形だからまりあい、彼を頂上へ頂上へと押しあげる原動力になつたものと考えられる。

かくして一頭地をぬいた曹操の生涯を記す陳壽の「武帝紀」は、それまで彼を「太祖」と呼んでいた筆を改め、「曹公」と記すに到る。錦の御旗を背負つた曹操の地位は、すでに他の競走者たちとは歴然と異なり、彼の行動は國家的行動になつたという歴史家の判斷を示すものであろうか。

だが、この「曹公」の軍事的政治的實力は、「齊の桓公」⁽¹⁵⁾「晋の文公」のごとき覇者となるには、まだまだ不十分であつた。彼の眼前には、依然として、彼よりはるかに強大な武力を有する袁紹がおり、この存在を打ち碎かない限り、覇權を獲得することは不可能だつたからである。従つて、以後建安五年に到るまで、曹操の主要な努力は、袁紹撃破に注がれることになる。この間の經緯の大略を記すと、次

のようである。

まず帝を許に迎えた翌年の建安二年（一九七）、呂布の董卓殺害に一役買つた驍騎將軍張濟の後繼者張繡を宛に攻撃。繡は一旦降伏するが、まもなく離反する。⁽¹⁶⁾曹操は、繡討伐をはかつたが、敗北を喫し、「人質を取らなかつたのが失敗だつた。理由がわかつたからには、二度とは敗けないぞ」と口惜しがつたと陳壽は記している。この戦いで、長子曹昂らが戦死している。なお張繡は、後に官渡の戦の時點で、再び曹操に降伏した。⁽¹⁷⁾次いで曹操は兵を東に轉じ、陳において袁術軍を撃破する。翌建安三年、曹操は呂布を下邳に追いつめ、水攻めの戦法を用いる。月餘にして呂布軍に内部崩壊がおこり、ここに呂布と陳宮を生け捕りにし斬殺する。

こうして後顧の憂いを除いたあとの建安四年から五年にかけてこそは、公孫瓚と連和しさらに強大になつた袁紹と、雌雄を決する時期であつた。建安五年（二〇〇）冬十月、曹操は、持久戦のあげく、官渡で袁紹軍に潰滅的な打撃を與え、袁紹を潰走させるに至る。この敗戦の翌年、袁紹は吐

血發病して死亡したのである。⁽¹⁸⁾

こうして、最大の強敵袁紹を撃破したことによつて、曹操は名實ともに實力者の地位を固めるのであるが、このことの畫期的意味について、陳壽は、改まつた調子でこう記している。

「初め、桓帝の時、黃星有りて楚・宋の分に見ゆ。遼東の殷馮、天文を善くし、言う、後五十歳にしてまさに眞人梁・沛の間に起こり、其の鋒當るべからずと。是に至りて凡そ五十年、而して公 紹を破り、天下に敵莫し。」(武帝紀)

篡奪を正當化しようとする場合やあるいは貴人の死を運命化しようとする場合など、良きにつけ悪しきにつけ何かメルクマールになる事柄を記すたびに、必らず怪異な自然現象を持ち出して來て、自然と人事の符合を強調するのは、普遍的にみられる陳壽の敘述法であるが、——『魏志』方伎傳に收録されている管輅という方士の傳において、陳壽

はかなりのスペースをさいて、異常な熱意を籠めつつ管輅の豫言の適中率の高さを贅え、その事例を列舉して、自然現象が人事の變を豫言することを強調している。陳壽の祖國蜀では、魏の「文學」に對して「學問」が盛んであり、『蜀志』において、周羣・許慈・師の譙周・郤正らの學者グループで傳一卷が立てられている位である。蜀の學者たちは、正統的な學問である五經については無論のこと、神祕な豫言の書である讖緯についても、更には占星術等についても、盛んに研究していたらしい。思うに、陳壽もまたこうした蜀の學問の系統を引いているのであらう。

「武帝紀」において、こうした神祕的・豫言的敘述がなされているのはこのみである。このことは、陳壽が、曹操の生涯において、この袁紹撃破を、實權への道の決定的な轉換點であると考えたことを示している。そして、この判斷は全く正當だと思われるのである。

もちろん曹操は、眞實ここで天下無敵になつたわけではなく、彼の出兵は袁紹の死後も依然として續行されている。例えば、建安八年(二〇三)から十二年(二〇七)にかけ

ても、斷續的に軍事行動をおこして袁氏兄弟(袁尙・袁熙・袁譚)⁽¹⁹⁾を攻撃し、袁紹の殘存勢力を除去せんとしているのであるが、この袁氏兄弟が、父袁紹の後繼の座をめぐつて血肉間抗争を展開して力を相殺しあつたこともあつて、彼らはもはや曹操の敵ではなく、まず建安十年に袁譚が敗死、その二年後には、袁尙・袁熙が逃亡先の遼東の公孫康によつて斬殺され、袁氏一族は滅亡するに至るのである。

しかし、この時期以降の曹操は、智略の限りを盡してライバルに打ち勝たんとして來たかつての曹操とは、明らかに異なつて來ている。彼はその智略の方向を、本格的に内政の整備・強化に向け始めるのである。

例えば、建安五年官渡での戰勝の時點では、麾下の軍人がひそかに袁紹に送つた手紙を、過去は水に流すとばかりに燃やしてしまつたその曹操が、建安八年には、「自ら將に命じて出征せしめ、但功を賞するのみにて罪を罰せざるは、國典に非ざるなり。其れ令して諸將の出征し軍を敗りし者は罪に^{あた}抵り、利を失いし者は官爵を免ぜしめよ」との令を發布して苛酷な嚴罰主義への轉換を示したかと思うと、

同十二年には、「吾れ義兵を起して暴亂を誅してより、今に於て十九年、征する所必らず克つ。豈に吾が功ならんや。乃ち賢士大夫の力なり」云々と述べて功勞者を封爵するなど、嚴格な法治主義とけじめだつた恩情とを、臨機に使ひわけて、人心を統御し、體制を確固不拔のものに固めあげていくのである。

こうした「鞭とアメ」の統治術は、「百姓」にもそのまま適用され、「刑は百姓の命なり」(慎刑令)という信念から刑法を強化すると同時に、あるいは、五百戸以上の縣に學校を置き、俊才を選抜して學問させるように發令したり(建安七年秋七月令)、あるいは「國を^た有ち家を有つ者は、寡きを思えずして均しからざるを思う。貧しきを思えずして安からざるを思う」(論語・季氏)という儒家的政治理念から豪族の土地兼併を制限する法律を制定したりして(建安九年九月令)、着々と社會・經濟機構の整備を進めていくのである。

曹操がこうした法律・社會・經濟に明るい創業者の目を持つていたことは、早くも、建安元年、天子を許に迎えた

その年に、「屯田」を起こしたことにあらわれていると、最近の論者は説く。この「屯田」によつて、戦亂と饑饉のもたらした「人相食」⁽²⁰⁾む飢餓状況を救ひ社會を安定させたことが、曹操の勢力安定の一大原因になつたとは、何茲全の『魏晉南北朝史略』に説かれているところであり、下部構造からいへば、おそらくその通りに違ひない。そして、曹操が、「白骨野に露され、千里雞鳴無し、生民百に一を遺すのみ、之を念えば人の腸を斷たしむ」と歌う「蒿里行」の悽絶たる風景こそ、彼にこうした屯田政策をとらせた原イメージだつたのであらう。

だが、この屯田政策にしても、何茲全も指摘しているごとく、本當に飢えたる民衆を喜ばせたかという点、決してそうではないのである。例えば、『魏志』「袁渙傳」には、「是の時（建安初期）新たに民を募りて屯田を開くも、民樂しまず、多く逃亡す」という記載があり、當時沛の南部都尉だつた袁渙が、逃亡防止策として、民衆自身の意志によるべきであり、屯田を喜ぶものだけ受け入れ、嫌うものには強制すべきでないと獻言し、曹操はその意見に従つた、

曹操 論（井波）

とある。これは、當時の「屯田」が民衆にとつてむしろ有難迷惑な、強引極まりない強權をかさに來た「強制勞働」と受けとられていたことを示している。

曹操の理想は、確かに、その自作の樂府「對酒」で、

對酒歌

酒に對して歌わん

太平時

太平の時

吏不呼門

吏は門に呼ばず

王者賢且明

王者は賢且つ明

宰相股肱皆忠良

宰相と股肱は皆な忠良にして

咸禮讓

咸^みな禮讓あり

民無所爭訟

民は争ひ訟する所無く

三年耕

三年耕せば

有九年儲

九年の儲有り

倉穀滿盈

倉穀は滿ち盈つ

班白不負戴

班白は負戴せず

雨澤如此

澤を雨^あらすこと此の如くなれば

百穀用成

百穀は用て成る

却走馬以冀其土田 走馬を却けて以て其の土田に冀^{つちか}う

爵公侯伯子男

爵は公侯伯子男

咸愛其民

咸な其の民を愛し

以黜陟幽明

以て幽と明とを黜陟す

子養有若父與兄

子のごとく養うこと父と兄の若き有

り

犯禮法

禮法を犯すものは

輕重隨其刑

輕重 其の刑に隨い

路無拾遺之私

路には遺を拾う私無く

囹圄空虛

囹圄は空虛

冬節不斷人

冬節にも人を斷ぜず

耄耋皆得以壽終

耄耋皆な壽を以て終るを得

恩澤廣及草木昆虫

恩澤は廣く草木昆虫にも及ばん

と歌うような戦争も犯罪もなく、賢明な支配者によつてよく治められた豊かな社會——太平——を招來することにあらつたのであらう。だが、現實はといえば、「白骨露於野、千里無雞鳴」。この現状認識と理想の接點に、あらわれて

來たのが、手段としての法衛主義であつたと思われる。ユートピア(太平)に到る過渡として、たとえ酷虐變詐といわれようが、ともかく内政面でも軍事面でも現實的効率をあげて、この荒み切つた現状を打開していくより道は無いと、曹操は考えたのではなかつたろうか。「治平は德行を尙び、有事は功能を賞す」(建安八年三月庚申令)あるいは、「古えより受命及び中興の君、曷んぞ嘗て賢人君子を得て之と共に天下を治めざらんや、(中略)今天下尙お未だ定まらず、此れ特に賢を求むるの急時なり」(建安十五年春、求賢令)と、ことあるごとに治の世と、亂の世を對比し、現在を亂——過渡——の世と規定する曹操は、まさに必要惡としての政治惡の效用を熟知し、意識的にそれを運用した人物だつたのである。

そしてまた、こうした曹操の夢と現實の因果關係の中で、どうしても解消し切れなかつたものが、激發する感情となつて詩の中に噴出したところに、詩人曹操が生まれたのだともいえよう。

だが、彼の中國全土統一の夢は果たされなかつた。建安

十三年（二〇八）、劉表の死後、荊州併吞を意圖して出兵した曹操は、史上有名な「赤壁の戦」で、劉備と孫權の連合軍に劇的な大敗北を喫して撤退、後の魏吳蜀の三國鼎立の契機を作り出すことになったのである。⁽²²⁾しかし、自身の樂府「短歌行」其二で、「周西伯昌、懷此聖德、三分天下、而有其二」云々と詠史の體を借りて歌っているように、政治の中樞たる中原はすでに曹操の支配下にあり、そこにおいて内政の強化につとめていた曹操の實權はびくともしなかつた。この戦いののち、彼は、建安十六年（二二一）に關中で叛亂をおこした韓遂・馬超らを討伐・平定し、荀彧の悲劇をはさみつつ、十八年（二二三）には魏公となつて九錫を受け、二十一年（二二六）には魏王となつて（以後陳壽の「武帝紀」は王と記す）、人臣の位を極めている。

建安二十五年（二二〇）正月、死。時に六十六歳。陳壽の記載するその遺令には、

「天下尙未だ安定せず、未だ古えに遵うを得ざるなり。葬畢れば、皆服を除せよ。其の兵を將い屯戍せし者、皆

屯部を離るるを得ず。有司各おの率いて乃ち職^{つかぎ}れ。斂^{あつ}むるに時服を以てし、金銀財寶を藏する無かれ」

とある。まだ劉備と孫權が残つていた。「命なり」と達觀して死ぬには、あまりに曹操は人の世への執着が強すぎ——というより、彼は命などというものを全く信じていなかったのであるが（後述）——、やり残したことが多すぎた。この曹操の遺令には、陳壽も裴松之も録していない佚文があり、晋の陸機はそれをもとに「魏の武帝を弔う文」（文選卷六十）を書いているのであるが、ここに引用された曹操の遺文は、心を残して他界した曹操終焉の心理を、あますところなく表現したものである。

「吾が婕妤妓人をば皆銅爵（雀）臺に著^おき、臺の上に於て八尺の牀を施し、總帳を張り、朝晡脯^{たぐい}繡の屬^{たぐい}を上げ。月朝十五日には輒ち帳に向つて妓を作せ。汝等（曹丕らを指す）時時銅爵臺に登り、吾が西陵の墓田を望め」。

さらに又、

「餘香の分つべきは諸夫人に與えよ。諸舍中爲す所無きは學んで履組を作りて賣れ。吾が官を歷て得し所の綬は、皆藏中に著け。吾が餘衣裘は別に一藏と爲すべし。能わざる時は兄弟共に之を分つべし。」と。

この異様に細やかな自らの死後への配慮こそ、「情累を外物に繫け、曲念を閨房に留」める英雄臨終の「蒙昧」だと、陸機を嘆かせたところのものである。しかし、これもまた、死して後もなお、死者として隔離された形で祭られるのではなく、まさしく「生けるが如く」ありたいという曹操の激しい現世追求、ひいては現世への執着心をあらわすものだと考えられる。この心理は、先に引いた「斂むるに時服を以てし云々」、つまり埋葬に際して、殊更なことはするなと戒しめる遺令の指示内容とも相呼應している。

結論的にいえば、このように醜惡なまでに現世に執着し、

粘り強かつたからこそ、曹操は、激動する世の英雄となりえたとも、いえるであろう。

こうして曹操が死んでいつた後九カ月にして、曹丕が獻帝より禪讓を受けている。曹丕には、靈帝の時徴されて典軍校尉になつた當初には、國家のために賊を討ち、征西將軍になつて、その墓に「漢故征西將軍曹侯の墓」⁽²³⁾と銘記されることだけが望みだつたという父の屈折と逡巡は、すでに無縁のものでつたのである。

以上、曹操の生涯に關して述べたが、次にこうした曹操の生き方をつらぬく心的態度（人生哲學）について考察してみたい。

二

曹操の行動・處世を支える顯著な心的態度として注目されるのは、人間を超越した天命とか運命とかを信ぜず、自己の能力や經驗、ひいては個人の能力を第一と考えたことである。

それを最も端的に示すのは、建安十五年十二月己亥令

(述志令) の

「或いは人は孤の彊盛、性天命を信じざるの事を見、恐らく私心ひそみに相評して、不遜の志を有すと言ひ、妄りに相付度せん。毎に用つて耿耿たり」

という箇所である。この「天命不信」の一つの具體的なあらわれとしては、曹操が迷妄に満ちた所謂「邪教淫祀」はむろんのこと、「漢行已に盡く、黃家當に立つべし」といつた風な呪術的豫言や、また、『魏書』にみえる侍中太史令王立のことは、「天命去就有り、五行常には盛んならず。火に代る者は土なり。漢を承くる者は魏なり。能く天下を安んずる者は曹姓なり」⁽²⁴⁾ というような巫言に、冷靜かつ理性的に對處し、むしろそれらに對して反感を持つていたことがあげられる。行く末定かならぬ亂世にあつて、人々は不安におののき、自分を待ちかまえている未來の運命を豫見したいと願ひ、豫言者の言葉に耳を傾けた。一見冷徹な合理主義者を思わせる息子の曹丕も、また、對立者の劉備

曹 操 論 (井波)

もこの一般的精神狀況の呪縛からまぬがれることはできなかった。⁽²⁵⁾ところが曹操だけはそのワナにはまることを、拒絶する。彼にとつて運命とは自分が作つていくものであり、決して「天」などから與えられるものではなかつたのである。つまり、彼は、おのが知力と現實的能力を超越した不可知かつ非合理的な世界の存在を、認めようとしないのである。

いうまでもなく曹操には、「氣出唱」「陌上桑」「秋胡行」など數篇の神仙をテーマにした遊仙ファンタジーともよべる數篇の樂府作品がある。しかし、これらはいずれも、既存の古樂府のテーマにそつた虚構性の濃厚な作品ばかりであり、心を高みに向つて解き放つための道具立てとして、人々に耳なれた「神仙」の世界を扱つたに過ぎないと考えられる。

さて、曹操のこうした理性を第一義とし、神祕——超越性を忌避する心のあり方を示す記述は史書の隨所にみられ、今試みに列舉すると以下のである。

——後漢の光和末期、青州濟南の相に任じられた青年曹操は、六百以上も祠を設けて鬼神を祭る風が極度に盛んであつたこの地に赴任するや、その祠をことごとく破壊し盡し、以後祭祀を禁斷した。(魏書)

——また初平三年、兗州の牧となつて、青州の黃巾を攻撃した時のこと、黃巾から手紙がとどけられ、そこには、「昔、(君は)濟南に在りしとき、神壇を毀壞せり。其道乃ち中黃太乙(黃巾の美稱)と同じ。道を知れるがごときに、今更に迷惑す。漢行已に盡き、黃家(黃巾)當に立つべし。天の大運、君が才力の能く存する所に非ざるなり」とあつた。才力こそすべてとする曹操は激怒して、黃巾を罵倒し、才知の結晶たる奇襲戦法を驅使して、黃巾を屈服させ、三十萬の青州兵を獲得したのであつた。

(魏書)

また後年、祖廟に詣でた時も、曹操は、いささか奇妙な合理的理論を操つて、神祕的儀式に抵抗をこころみている。

曰く、

——議者は、祠廟に上殿する時には履をぬぐべきだとしているが、私は錫命を受ける時さえ、劍を帶び履をぬがないで上殿した。いま廟で履をぬげば、それは先祖を尊び君主を粗略にすることになる。だから、私は敢えて履をぬがずに上殿する。又祭に臨んで清めをするにあたつて、禮では手を水につける眞似をするだけで實際に洗わない。大體手を洗つて清め敬意を表するものなのに、眞似をするだけで手を洗わない禮など聞いたことがない。そのうえ、『神を祭るは神在ますが如くせよ』というではないか。だから、私は實際に手を水につけて洗う云々、と。(魏書)

さらに、息子の天才兒曹沖が夭折した際、悲嘆にくれた曹操は、甄氏の死亡した娘と沖を合葬したうえ——所謂「冥婚」である——、彼に騎都尉の印綬を贈つてゐるが、この曹操の發想にも、一種變型的な合理性が認められる。

この時、曹操は、死せる沖に生ける人間と同様の幸福を追贈して、死後の世界を現世と同一の地點にまで引き戻しとらえ直すことによつて、死兒への愛情を表現するとともに、自らの悲しみに決着をつけようとしているのである。このことは、曹操が死後の世界をも、不可知な彼岸の世界とは考えず、逆に、現世と同一の合理的法則によつて貫かれた世界、つまり「この世のごとく」に意識せんとしていたことを示している。この面からいえば、先述した陸機の「魏の武帝を弔う文」にみえる遺令のくだくだしい死後への配慮もまた、こうした死後の世界を現世のごとくみなそうとする意識の一つのあらわれとみることもできる。

さてこのように、曹操が、終始一貫して天命や神秘性に對して不信を標榜しつづけたために、貴人の死に際しては必らず豫兆としての怪異な現象を記すことを忘れない陳壽も、曹操の死の場合においてのみ、何事も記していない。陳壽は、例えば、曹丕の死に先立つて、「許昌城の南門故無くして自ら崩る」と記し、吳の孫權の死に先立つて、

「大風あり、江海涌溢し、平地深さ八尺、吳の高陵の松柏

斯^すけ抜けて、郡城の南門飛落せり」と記し、蜀の劉備の死に先立つて、「黃氣秭歸より十餘里中に見ゆ、廣さ數十丈」と記し、その「命運」が盡きたことを暗示している。にもかかわらず、曹操にのみそうした記述がなされていないということは、曹操の生き死にに對する陳壽の意識が示されておき、曹操の「天命不信」が如何に徹底したものであるかを浮き彫りにしている。曹操は、自ら生きかつ死んだのだ、と。

こうして非合理の世界に反撥し續ける曹操は、まさしく時代の狀況がはなはだしく安定を缺いたものであつたがゆえにこそ、その狀況を打開し、更に、人間的な可能の領域を擴大せんとして、知性や現世的能力に絶對的な信頼をよせるのである。その意識は、時として次のような誇らかな自負のことばとなつてあらわれる。建安十六年、關中の叛亂軍の大將韓遂らと和平會談をした時のこと、一目曹操を見んものと押し寄せた異民族の群衆にむかつて曹操はいい放つ。

——汝ら曹公を觀んと欲せしや。亦猶お人のごときなり。
四目兩口を有するに非ず。但だ多智のみ。(魏書)

またその意識は、自らの能力を神聖化することへの齒止めにもなるのである。建安十九年、邊境の太守に任官する部下に對して、曹操は、異民族と交渉する時は、向こう側の出方を待つようにせよ、こちらから使者を出したりすれば、その使者自身の利欲心を刺激するだけでろくな結果にならないと注意を與えた。ところが、この部下は任官するや、その注意を聞かず使者を出した。結果は、案の定、曹操の言葉通りであつた。その時、曹操はいう。

——吾れ預め當に爾あるべきを知る、聖に非ざるなり、
但だ事を更ること多きのみ。(武帝紀)

この極めて意識的な曹操の天命・神祕不信——知性・能力の重視、という心的態度は、また、あの晩年に到るほどより激しくなる求賢・求逸才の欲求にもつながるものであ

つた。そして、「治平尚德業、有事賞功能」という觀點から、たとえ汚辱にまみれた者であつても、裏切者であつても、その人材が有能でさえあれば、彼は、構わずに登用しようとする⁽²⁷⁾。自らの理想を現實化するためには、有能な人材こそ、彼の最大の資本だつたのである。

そうして、このような積極的な人材招聘によつて曹操の周邊に集まつた人材の中には、「治國用兵」の術に長けた政治的人間のみならず、五言抒情詩を新たに個人のものとして確立し、そこに緊張感に満ちた世界を築きあげた建安文學の擔い手たちも含まれていたのであつた。曹操にとつては、文學もまた、人間のありうべき價値的能力の一つとして、意識されていたのである。

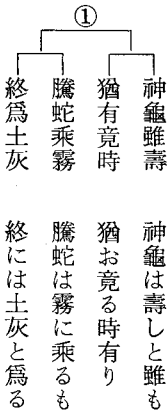
以下、自身、この建安文學の先驅者として、「槩を横たえて詩を賦し」⁽²⁸⁾た曹操が、そこにおいて、自らの情念をどのような形で燃焼させ、自己表現を果たしたか、について考察してみたい。

三

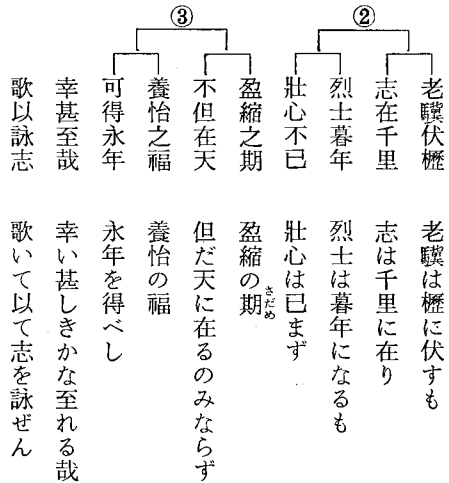
曹操の現存する作品は二十餘篇の詩のみであり、このすべてが樂府體をとつてゐる。そして、これらは大むね酒席で、器樂の伴奏のもとに歌われたと傳えられる。

人間存在を巨大な運命の支配化にある微小な存在としてとらえ、その生命の有限を嘆くというテーマは、匿名性の中で育まれて來た漢代樂府や古詩十九首に普遍的にみられるものであり、曹操の作品もまた、その基本情調の延長上に作られたものであつた。だが、時として、彼の行爲者としての情念や認識が、そうした傳統の枠組みを突き破つてゐるのが認められる。「步出夏門行」の第五首「龜は壽しと雖も」は、その見やすい例の一つである。

龜雖壽



曹操 論 (井波)



この詩は、三つの部分に分けることが出来る。まず冒頭の四句は、三千年の壽命を保つ龜、天空はるかにかけのぼる龍、これら超世的なものでさえ生物の宿命、死をまぬがれることができないと歌い、まして、より限定付けられた時間しか持てない現世的な生物、人間が死をまぬがれえないのは當然だとの普遍的命題を強調し、暗示的に提示する。ついで「老驥伏櫪」から「壯心不已」までで、だが、そう

した自明の眞理に限定付けられながら、老いたる名馬、老いたる烈々の士、これら現世で最もたたえらるべき過去を持つ存在は、なおも心を燃やし續け、外側から強制された老い——死の宿命に、心くじけることはないのだと歌い、第一の部分のテーゼが必らずしも、絶對的威壓にはなりえないことを示す。これを受ける末尾の四句は、具體的イメーじ、即ち神龜・騰蛇と老驥・烈士の積み重ねによつてすでに方向付けられた感情に、意味付けを與えるべく、結論としての人生哲學を開示する。人の命運を定めるのは何も天だけではない。人間自身の養生による幸福な生活、それは壽命さえおぼすことができるのだ、と。

個々の事例について斷定を積み重ねていつたうで、それらの事例から抽象される哲學を、簡潔にかつ確信にみちて提出するという構成は素朴ではあるが、この詩に非常に力強くせりあがついていく調べを與えており、人間には運命を超越していく可能性があるので、という内容の雄々しさを効果的に浮かびあがらせることになつてゐる。そうして、このように、「盈縮の期、但だ天に在るのみならず」と、

「天命」(運命)と人間の關わり方を、絶對的なものとしてではなく、可變的なものとしてとらえるテーマには、前章で述べた曹操の天命不信——人間の現世的能力の信賴、という彼の行爲を支える心的態度と相呼應するものが認められるのである。

こうした表現の方向は、また「短歌行」其一にもみられる。

短歌行 其一

對酒當歌	人生幾何	譬如朝露	去日苦多
慨當以慷	憂思難忘	何以解憂	唯有杜康
青青子衿	悠悠我心	但爲君故	沈吟至今
呦呦鹿鳴	食野之苹	我有嘉賓	鼓瑟吹笙
明明如月	何時可掇	憂從中來	不可斷絕
越陌度阡	枉用相存	契闊談讌	心念舊恩
月明星稀	烏鵲南飛	繞樹三匝	何枝可依
山不厭高	海不厭深	周公吐哺	天下歸心

卽興の作と思われるこの作品は、情動を情動のまま燃焼

させ、歌いあげていることにおいて、昂揚した響きを噴出させている。この詩は大變誦しやすく（勿論元來は歌われたものであるが）、また耳ざわりのよい、聴覺的に卓越した詩である。この流暢さのよつてくるところは、第一には、要所所に「人生幾何」、「何時可援」、「何枝可依」と、疑問文をはさんで問いかけの調子を響かせたところに、また第二には、青青(qīng, qīng)・明明(míng, míng)、及び悠悠(yōu, yōu)・呦呦(yōu, yōu) という疊語を重ねたところにあると思われる。更に、この疊語のうち悠悠と呦呦はほとんど同音である。ちなみに、この詩の、「青青子衿 悠悠我心」は、『詩經』鄭風の「子衿」の冒頭の二句を取つたものであり、また「呦呦鹿鳴」から「鼓瑟吹笙」までは、『詩經』小雅「鹿鳴」の四句をそのまま取り入れたものである。この「子衿」の二句と「鹿鳴」の四句の合體の操作が爲されたのは、意味的な關連性よりも、悠悠・呦呦の同音の連想によるものであろう。いずれも音樂的配慮にもとづく即興の作であることを、うかがわせるに足る材料である。

曹 操 論（井波）

「高きに登れば必らず賦し、新詩を造るに及びては、之を管絃に被け、皆樂章を成した⁽²⁹⁾」といわれる曹操の作品には、全體的に即興的要素が多分に含まれていると思われるが、このことは、曹操の作品を骨氣太く強いものにしていく一つの要因にもなっている。なぜならば、熟慮と内省を重ねて、感情や思念を整理することは、その表現により緻密で複雑な齊合性を與えることにはなるが、どうしても初發の情動を一旦沈下させることになり、その結果として表現に内在する勢いを弱めることになりがちだからである。

それはさておき、この「短歌行」においては、人生有限の悲哀さえ、彼の現世的な志の追求を、より一層押し進め高める觸媒としてしか作用していないことがみてとれる。

詩は、「酒に對して當に歌うべし、人生幾何ぞ、譬えば朝露の如し、去る日は苦^{はな}はだ多し、慨して當に以て慷すべし、憂思忘れ難し、何を以てか憂いを解かん、唯だ杜康あるのみ」と、人生有限の感慨を前提として、それを解消するもの、酒への賛美を歌うことから始まり、良き人材を得んとする願望とそれが得難いことの憂愁との交錯を歌うことを

經過して、最後に、周公旦がいつた入口に含んだ物を吐き出してまで訪問者と面會し、人材を獲得しようとしたという故事に託して、爲政者としての自身の抱負を披瀝することとて歌いおさめているのである。

ここで、曹操は、その感情の燃焼の方向を、あくまで人知によつて充實さるべき現世に向けることによつて、人生有限をテーマとする漢代古樂府や古詩にみられる類型的なパターン（人生有限——運命への從屬を表明する諦念・デカダンな快樂賛美）を、まことに健康かつ晴朗にうち崩しているといえよう。

曹操が、既存の樂府題の古辭にとらわれず、「薤露」「蒿里行」の挽歌に獨自な内容を盛りこんだことは有名であるが、この「作りかえ」の發想と意識についても、注目すべきものが認められる。

士大夫庶人の野邊の送りに、柩をかつぐ者が、死者を悼んで歌つたとされる「蒿里行」古辭は、次のように歌う

蒿里誰家地

蒿里 誰家^{だれ}の地ぞ

聚斂魂魄無賢愚 魂魄を聚斂して賢愚無し
鬼伯一何相催促 鬼伯一えに何ぞ相催促するや
人命不得少踟躕 人命は少しも踟躕するを得ず

人間と名のつくものは賢愚の區別なくすべて、あつという間に鬼伯（冥土の使者）によつて、蒿里（冥土）へ送り込まれてしまうのだとするこの挽歌は、いうまでもなく、絶對的に死と結びつけられた人間の宿命を悲痛な調子で一筋に歌い切る。この宿命を變えることは、誰にも出來はしないのだ。

ところが同じ題のもとに、曹操はこう歌うのである。

蒿里行

關東有義士 關東に義士有り
興兵討群凶 兵を興して群凶を討つ
初期會盟津 初めは期して盟津に會す
乃心在咸陽 乃ち心は咸陽に在り
軍合力不齊 軍合するも力齊わず

躊躇して雁行せり

勢利使人爭 勢利 人をして争わしめ

嗣還自相戕 嗣いで還た自ら相戕そこなう

淮南弟稱號 淮南の弟は號を稱し

刻璽於北方 刻璽 北方に於てす

鎧甲生蟣蝨 鎧甲 蟣蝨を生じ

萬姓以死亡 萬姓 以て死亡す

白骨露於野 白骨 野に露さらされ

千里無雞鳴 千里 雞鳴無し

生民百遺一 生民は百に一を遺すのみ

念之斷人腸 之を念えば人の腸を斷たしむ

鍾惺が「漢末實錄、眞詩史也」という如く、これは詩化された曹操の「現代史」である。初平元年の董卓討伐連合軍の集結、相互抗争、袁術・袁紹の野望等によつて齟齬した社會の荒廢を歌うこの詩は、先の古辭が人間の宿命に對する挽歌であるのに比して、いわば「社會への挽歌」であるといえよう。つまり曹操の蒿里は、彼岸にあるのではなく、「白骨野に露され、千里雞鳴無き」此岸、この荒涼

曹操論（井波）

たる現實こそ、とりもなおさず彼の蒿里だったのである。

その意味で、古辭とこの作の基本情調に共通項を見出し、「此用樂府題、敘漢末時事。所以然者、以所詠喪亡之哀、足當挽歌也。薤露哀君、蒿里哀臣、亦有次第」と、『昭昧詹言』で方東樹が述べているのは正當であると思われる。

この現實が、蒿里と化したのは何によつてか。それは、野望家の勢力間抗争によつてであると、曹操はいう。それはまた、「蒿里誰家の地ぞ」という古辭の間に對する、曹操の答えでもあつた。「蒿里狀況」を作り出すのもまた、惡しき人間の意志であると規定する曹操のこの意識は、古辭の宿命觀とは異質なものである。

古辭「蒿里行」と同一のテーマを、「薤上露、何易晞、露晞明朝更復落、人死一去何時歸」とデスパレートに歌う古辭「薤露」。それを、「惟漢二十世、所任誠不良、沐猴而冠帶、知小而謀彊、猶豫不敢斷、因符執君王、白虹爲貫日、己亦先受殃、賊臣持國柄、殺主滅宇京、蕩覆帝基業、宗廟以燔喪、播越西遷移、號泣而且行、瞻彼洛城郭、微子爲哀傷」と、人事の因果關係でとらえ、中平六年に起つた

事件の脈絡をたどることによつて、「漢王朝への挽歌」に、作り變えた過程についても、同様のことがいえるのである。

曹操は、恣意的に、既存の挽歌の古辭に、詩化された現代史をもちこんだのではない。そこで、あらたな挽歌をうたつた時に、彼は意識的に、人知を越えた巨大な力の支配下にある人間の無力を嘆く古樂府の宿命觀を、否定し超克したのである。そこに、これらの古辭を作り變えた曹操の意識自體の新しさがあつたとも考えられる。

人間によつてもたらされた「蒿里」(冥土)であり、「衰亡」であるならば、それを、同じ人間の手によつて回復し、作り變えることも不可能ではない。ここに、この「蒿里行」・「薤露」の荒涼たるイメージと、先にあげた「龜雖壽」「短歌行」との接點を、見出すことができよう。

この世の「蒿里」をたじろぐことなく凝視める詩人曹操の強さは、激動の世を己が腕一本で飛翔しつづけた軍略家・政治家の曹操の強靱さの一つの照りかえしであつたといえる。現實の政治の場では彼はより少なく詩人的であり、

時には殘酷にも非道にもなれる人間であつた。そしてまた、そうであつたからこそ、彼は「洪業」をなしとげたともいえよう。彼の詩は、文學を第一目的とするところから生まれて來たものではない。干戈のあいまいに、心を昂ぶらせ、樂しませるためのものだつたのである。だから、強靱さの裏返しとしての單調さ、粗さをも、その詩は持つてい⁽³⁰⁾る。この曹操の開拓した詩の分野に、更に精鍊された確固たる世界が構築されるには、彼の息子の曹植の出現を待たなければならぬ。

曹操は、遂に皇帝となることのなかつた魏王朝の「創業者」であり、同時に、それまで知識人のものでなかつた樂府の制作に始めて着手し、新たな文學の可能性を切り開いた價値の「發見者」でもあつた。

まことに、見事な人物というほかはない。

〔注〕

(1) 孫盛『異同雜語』(『武帝紀』裴注)、「……嘗問許子將、我何如人、子將不答、固問之、子將曰、子治世之能臣、亂世之姦雄、太祖大笑」。『世說新語』識鑒篇では、喬(橋)玄の

言葉としている。

(2) 『三國志』魏志「武帝紀」、陳壽評曰、「漢末天下大亂、雄豪並起、而袁紹虎踞四州、疆盛莫敵、太祖運籌演謀、鞭撻宇內、寧申（不害）・商（軼）之法術、該韓（信）・白（起）之奇策、官方授材、各因其器、矯情任算、不念舊惡、終能總御皇機、克成洪業者、惟其明略最優也、抑可謂非常之人、超世之傑矣」。

(3) 曹丕『典論』論文（『文選』卷五十二）、「……今之文人、魯國孔融文學、廣陵陳琳孔璋、山陽王粲仲宣、北海徐幹偉長、陳留阮瑀元瑜、汝南應瑒德璉、東平劉楨公幹、斯七子者、於學無所遺、於辭無所假、咸以自騁驥騄於千里、仰齊足而並馳、以此相服、亦良難矣」云々。

(4) 中平六年以前の曹操の事跡の大略は以下のごとくである。曹操は建安二十五年（二一〇）六十六歳で死亡しているから、逆算すると、後漢桓帝の永壽元年（一五五）の生まれということになる。「武帝紀」は、「桓帝世、曹騰爲中常侍大長秋、封費亭侯、養子嵩嗣、官至太尉、莫能審其生出来本末、嵩生太祖」と、宦官曹騰の氏素姓のはつきりしない養子曹嵩の子として生まれたと記す。更に、陳壽は、曹操は幼い頃から、「機警」にして「權數」があつたが、任俠放蕩で素行がおさまらなかつたと、その若き日の風貌を描く。二十歳で孝廉に推舉され、洛陽北部尉を経て、頓丘の令にうつる。裴注に引く『曹瞞傳』では、洛陽北部尉の時に、夜間通行禁止令を破

る者があれば、たとえ靈帝の寵臣の近親者であろうと委細かまわず五色棒で叩き殺したために、その法を守る峻嚴さに慄然とした人々が、推舉・榮轉の體裁をとつて、彼を頓丘の令に轉出させたと記す。頓丘の令になつたのは、『魏志』「陳思王（曹）植傳」に、建安十九年、曹操が孫權征討に赴くにあたつて、曹植を鄴都のおさえとして留めおいた際、「吾昔爲頓丘令、年二十三、思此時所行、無悔於今、今汝年二十三矣、可不勉與」と言つたと記されているところから、熹平六年（一七七）、曹操二十三歳のころと推定される。『魏書』では、このち一旦、從妹の夫宋奇に連座して免官され、後に、靈帝が廣く天下に政治の得失を下問した機に乗じて上書、「古學」に精通しているということで、再び徴されて議郎になつたとしている。光和末年（一八三年頃）、黃巾の亂が勃發し、二十代の終りの曹操は騎都尉となつて潁川の黃巾を討ち、濟南の相に榮轉。貪官を追放し、淫祀を禁斷する。やがて東郡の太守に徴しかえされたが就任せず、以後しばらく、混亂の度を深める政局の行方を見定めるためか、曹操はたびたび故郷に歸つて、「春夏習讀書傳、秋冬弋獵、以自娛樂」（『魏書』）という日々を送る。この間、結局は失敗した冀州刺史王芬らの靈帝廢立のクーデター計畫にも、曹操は見通しよく加擔していない。そして、中平六年、曹操は、刺史・郡守を殺害して蜂起した金城の邊章・韓遂らの暴動鎮壓のために、朝廷から徴されて典軍校尉となつた。このころ、折しも靈帝が

崩御したのである。

(5) 呂布は、入洛して勢力擴大をもくろむ董卓のために、最初的主君執金吾丁原を殺害し、その首を持って董卓のもとに到り、さらに後に、私怨を以て司徒王允と結託して、この二度目の主君董卓を殺害した人物である。『魏志』董卓傳・呂布傳

(6) 「武帝紀」、「太祖父嵩、去官後還譙、董卓之亂、避難瑯邪、爲陶謙所害、故太祖志在復讎東伐」。

(7) 張邈・袁紹・曹操は、若い頃からの友人であつたが、董卓征討連合軍をあげたところから、張邈と袁紹の間は險惡になつてゐた。このころ、曹操と袁紹の協力關係が強力になつたことから、張邈は疑心暗鬼になり、曹操の將陳宮の「今雄傑並起、天下分崩、君以千里之衆、當四戰之地、撫劍顧盼、亦足以爲人豪、而反制于人、不以鄙乎。今州軍東征、其處空虛、呂布壯士、善戰無前、若權迎之、共牧兗州、觀天下形勢、俟時事之變通、此亦縱橫之一時也」という提言に従つたと、『魏志』「張邈傳」は記す。二年後、張邈は部下によつて殺されてゐる。

(8) (A) 『魏書』「武帝紀」初平四年裴注、「……漢行已盡、黃家當立」。(黃巾の言葉)

(B) 『漢紀』「武帝紀」建安元年裴注、「(侍中太史令王)立又謂宗正劉艾曰、前太白守天關、與熒惑會、金火交會、革命之象也、漢祚終矣、晉魏必有興者。」

◎『魏志』「袁術傳」(興平二年)術會羣下謂曰、今劉氏微弱、海內鼎沸、吾家四世公輔、百姓所歸、欲應天順民、於諸君意如何。かくして、袁術は僭主となつてゐる。(なお、この袁術は建安四年に病沒。)

(9) 『魏志』「袁紹傳」、「袁紹字本初、汝南汝陽之人也、高祖父安、爲漢司徒、自安以下四世居三公位、由是勢傾天下」。

(10) 『文選』卷四十四收錄「爲袁紹檄豫州」。建安四年の作である。

陳琳の公文書作成における卓抜した才能に言及したものとしては、次のものがあげられる。

「孔璋(陳琳)章表殊健、微爲繁富」(曹丕「與吳質書」・『文選』卷四十二)

「琳作諸書及檄、草成呈太祖、太祖先苦頭風、是日疾發、臥讀琳所作、翕然而起曰、此愈我病。」(『典略』・「王粲傳」裴注)

(11) 「武帝紀」、「……養子嵩嗣、官至太尉、莫能審其生出本末」云々。(4) 参照。

(12) 『春秋公羊傳』昭公二十年、「君子之善善也長、惡惡也短、惡惡止其身、善善及子孫」。

(13) 『世說新語』假譎篇、「魏武少時、嘗與袁紹、好爲遊俠、觀人新婚、因潛入主人園中、夜叫呼云、有偷兒賊、青廬中人皆出觀、魏武乃入、抽刃劫新婦、與袁紹還出、失道墜枳棘中、紹不能得動、復大叫云、偷兒在此、紹邊迫自擲出、遂以俱

免」。この挿話は、曹操の若き日にすでに顯著な詐術の巧妙さに焦點を絞つたものである。

(14) 「武帝紀」、「建安」五年春正月、……公曰、夫劉備、人傑也、今不擊、必爲後患、袁紹雖有大志、而見事遲、必不動也」。また、「武帝紀」には、これに先立つ建安四年の記述に「吾(曹操)知紹之爲人、志大而智小、色厲而膽薄、忌克而少威、兵多而分畫不明、將驕而政令不一、土地雖廣、糧食雖豐、適足以爲吾奉也」とある。

(15) 曹操「短歌行」、「……齊桓之功、爲霸之首、九合諸侯、一匡天下……晋文亦霸、躬奉天王、受賜珪瓊、鉅鬲、彤弓、盧弓、矢千、虎賁三百人云々」

「建安十五年十二月己亥令」、「齊、桓、晋、文所以垂稱至今日者、以其兵勢廣大、猶能奉事周室也」。かくのごとく、齊の桓公・晋の文公は、曹操の理想的自己イメージであつた。

(16) この離反の理由を、「魏志」「張繡傳」は、「太祖南征、軍清水、繡等舉衆降、太祖納濟(繡の従父)妻、繡恨之、太祖聞其不悅、密有殺繡之計、計漏、繡掩襲太祖」と記す。

(17) 「張繡傳」の裴注「魏略」には、降伏後たびたび戦功をあげながら張繡はのちに、曹丕に、「君殺吾兄、何忍持面視人邪」と面罵され、自殺したと記す。

(18) この間に、劉備は、袁術が病没するや(建安四年)曹操のもとを出奔し、徐州刺史車胄を殺害して舉兵した。しかし、袁紹との息づまる對決の餘白をぬつて討伐軍をくり出した曹

操に破れ、袁紹のもとに走り、更に、袁紹が敗北するや、荊州の劉表のもとに身を寄せている。この時期の劉備の去就には、如何なる元素とでも結合する酸素を思わせるめまぐるしさが認められる。(根據地を持たない弱さのあらわれであろう)。

一方、吳の孫策は、建安五年、曹操と袁紹の持久戦の虚をついて、許を襲撃しようとして、暗殺された。ついで孫權があとを継ぎ、會稽太守に任ぜられて、吳に駐屯。着々と江南の地に勢力を擴大し始めている。

(19) 曹植の「洛神賦」のモデルに擬される曹丕の甄皇后は、この袁紹の中子袁熙の夫人であつた。鄴都陷落の際に曹丕に納れられ、黄初元年皇后となつたが、翌二年、曹丕の怒りにあつて殺されている。

(20) ④「魏志」「董卓傳」、「(初平三年)時三輔民尙數十萬戶、(李)傕等放兵劫略、攻剽城邑、人民飢困、二年間相啖、食略盡」。

⑧「武帝紀」、「是歲(興平元年)穀一斛五十餘萬錢、人相食、乃罷更兵新募者」。

⑩「魏志」「呂布傳」、「是時歲旱蟲蝗少穀、百姓相食」。(興平元年)

(21) 何茲全「魏晉南北朝史略」、「……由于屯田、他(曹操)解決了當時最嚴重的生產問題・軍糧問題・社會安定問題。由于屯田、他在當時普遍的飢荒使各個地方勢力饑餓餓垮的情況

下、獨獨能够穩定統治、並進而征服別人。」

(22) 孫權と劉備の間に連合が成立した過程については、『吳志』「吳主（孫權）傳」に次のように記されている。「建安十三年」荊州牧劉表死、魯肅乞奉命弔表二子、且以觀變、肅未到、而曹公已臨其境、表子琮舉衆以降、劉備欲南濟江、肅與相見、因傳權旨、爲陳成敗、備進往夏口、使諸葛亮詣權、權遣周瑜・程普等行、是時曹公新得表衆、形勢甚盛、諸議者皆望風畏懼、多勸權迎之、惟瑜・肅執拒之議、意與權同、瑜・普爲左右督、各領萬人、與備俱進、遇於赤壁、大破曹公軍、公燒其餘船引退、士卒飢疫、死者大半」。

(23) 「建安十五年十二月己亥令」〔武帝紀〕建安十五年裴注『魏武故事』「……後徵爲都尉、遷典軍校尉、意遂更欲爲國家討賊立功、欲望封侯作征西將軍、然後題墓道言『漢故征西將軍曹侯之墓』、此其志也。而遭值董卓之難、興舉義兵」云々。

(24) (8) ⑧参照。『漢紀』「……(8) ⑧……立後數言于帝曰、天命有去就、五行不常盛、代火者土也、承漢者魏也、能安天下者、曹姓也、唯委任曹氏而已、公聞之、使人語立曰、知公忠子朝廷、然天道深遠、幸勿多言」。

(25) 曹丕については、『魏志』「方伎傳」にみえる朱建平なる占いの師の傳に述べる所が、適切な一つの資料である。「朱建平、沛國人也、(中略)文帝爲五官將、坐上會客三十餘人、文帝問己年壽、又令偏相衆賓、建平曰、將軍當壽八十、至四

十時當有小厄、願謹護之、(中略)文帝黃初七年、年四十、病困、謂左右曰、建平所言八十、謂晝夜也、吾其決矣、頃之果崩」。(更に、陳壽は、朱建平が曹丕の座にいた賓客のために占った年壽も、すべての中したと記している。)

劉備については、『蜀志』の「周羣傳」(蜀の學者)に述べる所が、みやすい一つの資料である。「(周)羣少受學於(父)舒、專心候業、(中略)故凡有氣候、無不見之者、是以所言多中、州牧劉璋、辟以爲師友從事、先主(劉備)定蜀、署儒林校尉、先主欲與曹公爭漢中、問羣、羣對曰、當得其地、不得其民也、若出偏軍、必不利、當戒慎之、時州後部司馬蜀郡張裕亦曉占候、而天才過羣、諫先主曰、不可爭漢中、軍必不利、先主竟不用裕言、果得地而不得民也、遣將軍吳蘭・雷銅等入武都、皆沒不還、悉如羣言、於是舉羣茂才」。この記述は、劉備が占巫を身近において、事の吉凶を占わせていたことを示している。(蜀の學者たちの何割かは、こうした占巫の役割をかねていたものと考えられる。)

(26) 『魏志』「武文世王公傳」・「鄧哀王冲字倉舒、少聰察岐嶷、生五六歲、智意所及、有若成人之智、……年十三、建安十三年疾病、太祖親爲請命、及亡、哀甚、文帝寬喻太祖、太祖曰、此我之不幸、而汝曹之幸也、言則流涕、爲聘甄氏亡女與合葬、贈騎都尉印綬、命宛侯據子琮奉沖後」。

(27) 建安二十二年秋八月「求逸才令」(武帝紀)同年裴注『魏書』、「……負汙辱之名、見笑之行、或不仁不孝、而有

治國用兵之術、其各學所知、勿有所遺。

(28) 蘇軾「赤壁賦」、「……方其破荊州、下江陵、順流而東也、舳艫千里、旌旗蔭空、酹酒臨江、橫槊賦詩、固一世之雄也」。

(29) 『魏書』にいう。「……是以翫造大業、文武並施、御軍三十餘年、手不捨書、晝則講武策、夜則思經傳、登高必賦、及造新詩、被之管絃、皆成樂章」。當初、古學に精通しているということで議郎にあげられた曹操が(4)参照、歴史の表舞台におどり出てからも、變ることなく學問・文學に興味と情熱を持ちつづけたことを示す記述である。

(30) 曹操の詩に關する批評の主なもの、次に列舉する。

④曹公古直、甚有悲涼之句、(鍾嶸『詩品』下)

⑤孟德所傳諸篇、雖並屬擬古、然皆以寫己懷來、始而憂貧、繼而憫亂、慨地勢之須擇、思解脫而未能、寔憂之詞、數者而已、本無泛語、根在性情、故其跌宕悲涼、獨臻超越、細揣格調、孟德全是漢音、丕・植便多魏響云々。(陳祚明『采菽堂古詩選』卷五)

⑥孟德詩猶是漢音、子桓以下、純乎魏響、沈雄俊爽、時露霸氣、(沈德潛『古詩源』卷五)

⑦大約武帝詩沈鬱直樸、氣直而逐層頓斷、不一順平放、時時提筆換氣換勢、尋其意緒、無不明白、玩其筆勢文法、凝重屈蟠、誦之令人意滿、(方東樹『昭昧詹言』卷二)これらの評のほとんどは、曹操の詩の剛直さ、緊張度の高さ(悲涼)をたたえると同時に、その内在的な調子(格調)と漢代古樂

曹操論(井波)

府・古詩との近似性を指摘し(古直・漢音)、純然たる「魏響」になるのは、曹丕・曹植からであるとしている。

〔主な参考文献〕

- 1 丁福保 『全漢三國晉南北朝詩』
- 2 黃節 『漢魏樂府風箋』
- 3 余冠英 『三曹詩選』
- 4 陳壽撰裴松之注『三國志』
- 5 何茲全 『魏晉南北朝史略』
- 6 吉川幸次郎 『三國志實錄』

その他